

第115号
2014年
2月23日

（フルハイビジョンの4倍を超える高精細映像投影プロジェクト）を鑑賞しました。

このべゼクリク石窟寺院の中に描かれた仏教壁画の復元には、龍谷大学の岡田理工学部教授が中心となられ、約一年半の歳月をかけ完成されたものだと聞きました。

この仏教壁画の回廊を原寸大で復元したスペースに案内して頂きました。

鮮やかに浮かび上がる仏教壁画と対面、実際に石窟寺院の回廊に入つたかのような体験を味わうことができました。

宿泊は龍谷大学セミナーハウス「ともいき荘」にお世話になりました。

暖かい雰囲気の中に、法友の田村さんを交え、おいしい美酒をいただいたながら楽しい親睦のひとときを過ごすことができました。

二日目は5時過ぎに起床し、6時から「一晨朝のお勤め」にお参りしました。早朝のひんやりとした御堂には、たくさんのお参りの方々で身の引き締まる思いでした。

朝食の後はジャンボタクシーで洛東紅葉めぐりです。

まず銀閣寺に参拝しました。

波紋を表現した銀沙灘と白砂の富士山型の向月台とのコントラストはいつ見ても美しく人々を魅了します。特に展望所辺りのもみじが美しく、展望所からは銀閣寺、本堂、錦鏡池、銀沙灘が一望に見渡せて美し

この哲学の道は疎水に沿って作られた遊歩道で南禅寺あたりまで通じています。昔、京都の哲学者がこの道を思索にふけりながら散策したことから、「思索の小路」といわれ、いつしか「哲学の道」と呼ばれるようになったそうです。

永観堂の紅葉の美しさは最高でした。鮮やかな赤、黄、オレンジの葉が広大な境内の隅々まで広がっており、特に池に映る紅葉が素晴らしく感動しました。

阿弥陀堂のご本尊「みかえり阿弥陀」にお参りしました。この仏様は正面から拝んでも、そしらぬ顔で横を向いておられ、お厨子の横へまわると、そこからは、まっすぐに仏様のお顔を拝むことができます。

この「みかえり阿弥陀」については、偶然ながら一週間後に勤められた法輪寺報恩講の寺川幽芳先生のご法話の中で「かえりみる慈悲のまなざし」の資料と共に詳しくお話し下さいました。

永観堂拝観の後も「哲学の道」を歩き南禅寺に向かう予定でしたが、大勢の観光客で散策ムードどころでなく、再びジャンボタクシーに乗って、南禅寺山門↓近代美術館↓平安神宮など懐かしい東山一帯を車窓からの観光となりました。

短い二日間の旅でしたが、私にとっては、み仏の限らない慈悲

題材法話

前号からのつづき

六華園では仕方なく、A子ちゃんを警察に引き渡すこととなり、森川施設長が九条武子夫人に報告すべく夫人の部屋を訪ねました。

○九条武子夫人の涙
夫人は部屋の窓辺で机に向かつて読書しておられました。

森川さんは「実はこれこれしかじかで」と経過を説明し、警察に引き渡すことのお許しを願われました。

とところが夫人は、うつむかれたまま何も仰らない。そこで森川さんは、説明が足らないのかと思い、もう一度丁寧に話をされた。

それでも返事がない。森川さんは不審に思い、森川さんはそつと夫人のお顔をのぞかれました。

ポトリ、ポトリ・・。

夫人は本の上に涙を落とされていました。そして仰ったそう



です。

「森川さん、A子ちゃん、何回しくじったと仰いましたか」と。

森川さんは「はい、今回で十四回めでございます」と返事されました。

夫人は「十四回めでしくじったら、どうしても見放さなくてはならないのですか」

「A子ちゃんは十四回目ですが、思うてみますと、私はいままで、阿弥陀様の前で何度しくじってきたこととでしようか」と、また涙

いだかれてありとも知らずおろかにもわれ反抗す大いなるみ手に

阿弥陀様を何度も何度も裏切り続けてきた。何度

きても阿弥陀様は、『撰取不捨』、おさめ取って捨てお



かぬと誓っておって下さるのだ、との思いです。

この夫人の言葉を聞いた森川さんは、そのまま警察へ走り、事情を話してもう一度だけとお願ひして、A子ちゃんを六華園へ連れ帰ったそうです。

○A子ちゃんの涙
いつもならば途中で厳しくしかるのですが、この日はなにも言えず黙って連れ

帰ったそうです。そして森川さんは、A子ちゃんを部屋に入れる時に

「今日は何も言わないが、ただ一言だけ、これだけは聞いて欲しい」と言つて、

今日のいきさつを話し、園長先生が「A子ちゃん、ごめんね」と言つて涙を流されたことを話されたそう

です。そのことを聞いたA子ちゃん、はじめて泣いたのだそうです。

そして、はじめて「ごめんなさい」とあやまったのです。



その後A子ちゃんは無事に更正し、夫人のお世話で結婚もし、子供もできたそうです。

○阿弥陀さまの涙

阿弥陀様の働きには、大きく「知恵」と「慈悲」があります。

「知恵」の働きとは、凡夫が間違ひなく仏となる働きです。

「慈悲」の働きとは、その知恵の働きに背こうとする私を、共に悲しみ、抱き取つてくださる働きです。

九条武子さんの涙は、まさにその涙だったのではな

いでしょうか。21世紀は「心の時代」へと求められています。

この悲しみの心こそが現代社会に求められている心なのではないでしょうか。

共に阿弥陀様の慈悲の心を味わわせて頂きたいと思ふことであり

除夜会住職法話

